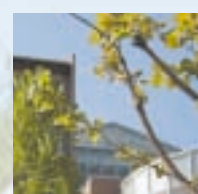
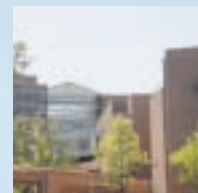


卒業生へ	3
二つの希望	学長 池端 雪浦
卒業生の皆さんへ	副学長（教育・学生等担当） 馬場 彰
饒の言葉	外国語学部長 小林 二男
お祝いと期待の言葉	大学院地域文化研究科長 立石 博高
卒業生から	7
外語祭と私	フランス語専攻 富永真実子
やりたいことを選ぶ	トルコ語専攻 倉本さをり
退職・転出教員からのご挨拶	9
BUZZ BUZZ	教授 オブラス・ピーター・ブライアン
たかが学問、されど学問	教授 稲田 雅洋
どういふ子供たちを世界に残すのか	教授 水林 章



卒業生へ

二つの希望

学長 池端 雪浦

(歴史学 東南アジア史)



学部卒業生の皆さん、大学院修士課程の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

職業人として、あるいは大学院・留学などに向けて、それぞれに新たな人生の一步を踏み出そうとしておられることでしょうか。そうした皆さんの未来に期待をこめて、二つの希望を述べておきたいと思います。

一つは、皆さんの本格的な勉強は実はこれからが本番であり、その勉強を生涯現役で継続していただきたいことです。21世紀は知価社会、知識基盤社会(knowledge based society)と言われております。知こそが社会的価値の源泉であり、新たな知の創造が技術革新、社会システムの変革をもたらして、持続的な社会発展に寄与するという未来見通しです。21世紀を担う皆さんは、新たな知の創造者であると同時に、新たな知、新たな技術を駆使できる高い能力を備えた職業人たることを期待されているのです。

継続的な学びを希望する理由はもう一つあります。それは二つめの希望とも係わるのですが、皆さんは今後、ますます激化する情報の洪水の中で、なにごとについてであれ、納得できる自分の判断を形成していかなければなりません。自分と社会との関わり、自分と企業や組織との関わりについても、みずからの視点から見つめ続けていく眼を持たなければなりません。みずからの確かな学びと考察に基

づく情報の選択が、これから必須の課題となってくるのです。

二つめの希望

は、企業人・職業人として、つねに企業や組織の公共性を自覚した人であって欲しいことです。昨年は企業の不祥事が続発した年でした。大株主保有比率の虚偽記載、粉飾決算、談合事件。製品の不具合が引き起こした死亡事故。107人もの犠牲者を出したJR宝塚線脱線事故。11月にはマンション・ホテルの耐震強度偽装が発覚し、未曾有の激震は2006年に持ち越されました。これらの事例はその一部にすぎません。

製品やサービス等の提供によって社会に貢献すべき企業が、経営者の私欲や利潤第一主義から、企業倫理をなおざりにし、社会に多大の被害を及ぼしていたのです。私たちの社会の歯車は、いまや、儲け第一の拝金主義によって、至る所で狂いを生じています。加えて限度を超える効率主義が働く人々の体と心を痛めつけています。私たちはこの時代の曲がり角に立って、公共性の認識を深め、人々がともに幸せに生きていける社会を再構築していかなければならないのです。皆さんの今後に期待いたします。

FUCHU NEW CAMPUS TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

CONTENTS

TUFS NEWS NO.121

帰国する外国人教師からひと言	12
東京外大での2年	朝鮮語 イ・ウンギョン
外語大のこと	ベトナム語 グエン・ティ・トゥアン
異文化の中での暮らし	トルコ語 セルチュク・イシュセヴェル
To:Fellow Members of Tokyo University of Foreign Studies Community	インドネシア語 スディピヨ
ゼミ紹介	16
●アフリカ・ゼミのすすめ	フランス語専攻 糸長 昌彦
●文化研究ゼミ	フランス語専攻 池田 珠枝
●英語史ゼミ	英語専攻 川添早久良
留学体験記	19
あこがれのセビリアで奮闘	スペイン語専攻 鬼塚 真維
(投稿記事)ウズベキスタン留学記	インドネシア語専攻 野原 悠佑
留学生コーナー	21
●カンボジア料理いかがですか	ISEPTUFS留学生 ホー・スレイニアン
お知らせ	23
●学務部(教務課)	



卒業生の皆さんへ

副学長 馬場 彰

(教育・学生等担当)



卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

皆さんが本学に在学された4年

間は、国立大学にとってまさに激動の時代でしたが、満足いく学生生活を送ることができましたか。入学時に選んだ専攻語の勉強と、3年次に進級してからの履修コースにおける専門の勉強という二重の課題を見事にクリアして、このたび無事に卒業されることになったわけですが、在学中の勉学上の負担たるや、かなり大きいものであったろうと忖度いたします。現時点では、その負担からやっと解放されたという思いのみが強くて当然でしょう。

皆さんにとって、本学で学んだことがはたしてどのような教育効果をもたらしたかという問題は、実は、これから実社会に入っていられる皆さんが自らの手で解答を見出していくべき問題ではないかと考えます。主専攻語や副専攻語の授業を通じて培われた語学力や、専門の授業を通じて培われた知識や問題解決能力を駆使して、皆さんの前に立ちはだかるかもしれないさまざまな問題に対して、勇気を持って主体的に取り組んでいってください。そのような過程を経由してはじめて、真の実力が身についてくるでしょうし、皆さんひとりひとりの人生の質も決まってくると思われまます。

21世紀に入って6年目を迎えましたが、日本も世界

もますます混迷の度を深めてきているようです。皆さんのこれからの人生も、おそらく、平坦な道ばかりが続いているとは思われません。しかし、たとえどんなに苦しい試練に出会うとしても、本学で学んだこと、あるいは、ここで出会った教師や友人たちとの交流を通じて培われたことを力強い支えにして生きていってくだされば幸いです。

本学は、これまでに、国内ばかりでなく広く海外に出て活躍する数多くの人材を輩出してきましたが、卒業生たちは世界各地で同窓生の集まりをもって相互の親睦を深めておられます。皆さんの中には、近い将来、海外へ出て行く機会に恵まれる方も多数いらっしゃるでしょう。その際には、是非このようなネットワークを通じて、先輩たちの生きざまにふれる機会を持たれるよう希望します。そこでは必ずや、本学の教育がどのような効果を発揮しているかについての典型的な実例を見出されることになるでしょう。

皆さんのご健康とご活躍を心よりお祈りいたします。

饒の言葉

外国語学部長

小林 二男



卒業を迎えられた皆さん、卒業、おめでとうございます。本学教職員の皆さんとともに、皆さんの門出を、心よりお祝いいたします。

本学の学則は、その第一条で、本学の基本目的を「外国の言語とそれを基底とする文化一般につき、理論と実際にわたり研究教授し、国際的な活動をするために必要な高い教養を与え、言語を通して外国に関する理解を深めることを目的とする」と謳っていますが、皆さんはこのような基本理念を掲げる本学において、外国語を修得し、その背景にある文化について学んできました。その過程で、様々な人と出会い、様々なことを経験し、異文化を理解するということ、人を理解するということをも学んできたと思います。

今、私達の生きているこの世界は極めて深刻な状況にあるといわねばなりません。依然として、民族や宗教の違い、経済的利害等による戦争があり、今この瞬間でさえ、人と人が殺しあっています。貧しくて食べ物も十分でない、病気になっても薬がない、最低限の教育さえ受けられないといった人々も大勢います。自然破壊も進行しています。

今、私達はどこに向かって歩んでいるのでしょうか？

私は、これから人類が進むべき方向は、民族・宗教・それぞれが属する国家の壁を乗り越えて戦争のない平和な地球にする、地上から貧困・飢餓などをなくし人々が伸びやかに生きられる世界をつくる、こうした方向であると思います。

本学で学んだ皆さんは、外国語を身に付け、その言

葉が使用されている世界諸地域の文化・社会に関する豊かな知識・グローバルな視点を身につけています。世界諸地域の人々がどのような状況の中で、どのような生活をして生きているのか(生きてきたのか)、どのような問題に直面し、どのように乗り越えてきたか(乗り越えようとしているのか)について専門的な知識を持っています。このことは、世界諸地域で生きている人々の痛みが分かる立場にあるということでもあります。皆さんが、本学で学んだ知識と本学で磨いた知性を基礎に、その持てる力を仕事の面で大いに発揮すると同時に、人の痛みを想像することのできる人間として、世界諸地域に生きる人々とともに、今までに人類が達成することのできなかつた戦争・貧困などのない人類社会を実現する、この方面でも持てる力を発揮し活躍されんことを願ってやみません。

本学での学業を終え、新たな門出をしようとしている皆さんに、饒の言葉として中国の文学者・魯迅の言葉を贈ります。

「思うに希望とは、もともとあるものとはいえないし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」



お祝いと期待の言葉

大学院地域文化研究科長

立石 博高

卒業生、修了生の皆さん、おめでとうございます。

祝辞のあと

には「乾杯」が付きものですが、スペインでは「サルー」と言います。「健康」という意味で、これから社会で活躍される皆さんに、健康であることを心より願います。この「サルー」の後にスペインではいくつかの言葉が続きます。まずは「ディネーロ」、「お金」です。健康であってもお金がないと人生は楽しめないという少し俗っぽいことですが、皆さんは企業ならばいわゆる中間管理職をめざして活躍されるであろう方々ですから、お金の心配はいらないでしょう。次は「アモール」、「愛情」ですが、これは人によっては難しいかも知れません。でも皆さんは、この外語大でのキャンパスライフを通じて豊かな人間関係を築かれたと思いますから、きつとうまく行くと思います。もう、素敵な出会いを経験した人もいるかも知れませんね。

さて、最後に添える言葉ですが、これら（健康、お金、愛情）を楽しむための「ティエンポ」つまり「時間」です。しばらく前ならば、若い人たちに時間があるのは当たり前でしたが、近年の状況はひどくなっていますね。バブル崩壊前には、長時間労働が反省されて週休二日制やサービス残業廃止が実現し

ていったのですが、いまは競争や成果が主義化されてしまい、仕事以外の時間をもつことがまるで乗り遅れになるかのような意識を生み出しています。皆さんが社会のなかで自分の「時間」をもてることを心より願います。

ただ、そのためには自分だけの活動、自分だけの努力で足りるとは思いません。時間は他の人との関係のなかで生れるものです。いま日本は世界のなかでももっとも社会的格差の強い社会となっています。正社員以外に派遣社員、アルバイト社員などが急増し、富裕者と貧困者への二極分解が進んでOECDの定義でも、同加盟国中第5位の高貧困率の国となっているのです。こんななかで、皆さんだけが「勝ち組」になってほしいと願いたくはないのです。19世紀末の野放図な競争的資本主義の結果、スペインでも二極分解ははなはだしいものでした。当時、労働者たちは、「サルー」に続けて、「トラパーホ」と「フスティシア」という言葉を挨拶に付け加えたといわれます。つまり「労働機会」と「社会的公正」です。これから社会に出て活躍される皆さんに、「乾杯（健康）」、そしてこれら二つも添えて、お祝いと今後の活躍への期待の言葉とさせていただきます。

Salud, trabajo y justicia.

外語祭と私

フランス語専攻

富永 真実子



高校生の頃、大学生はもう「大人」だと思っていた。大学とは秘密の空間で、入ったら自動的にオシャレになって、知識も増えて成長する、そんな空間だと思っていた。4年後の今、卒業を目前にして、思っていたような「大人」にはまだなれていない自分に気付く。そしてこの4年間に思いを馳せる。

大学というのは一体どういう空間なんだろう。

これは多くの人に同意してもらえないんじゃないかと思うのだが、外語大という大学はちょっと独特だ。出席に厳しい主専の授業、モチベーションとバイタリティに溢れたクラスメイトたち。就職活動用の作り物の「目標」ではなくて、人生にアツい人が多い。私は既習者として入学したこともあって、当初この外語大特有の雰囲気、とても戸惑ったことを今でもよく覚えている。

そんな私を変えるきっかけになったのが、外語祭だった。外語大生は誰も寒風吹きすさぶ中料理を売った（作った）記憶、あるいは苦勞して外国語の長台詞を覚えた記憶、あるいはお客として美味しいものを食べ歩いたり、室内の企画を見歩いた記憶を共有していると思う。この外語祭を運営する実行委員として、私は4年間を過ごした。

外語祭は学園祭として独自性があり魅力に満ちていて、そしてだからこそ、運営するには難しい学園祭だ。既存の法体系に収まりきれない企画のオンパレード。特に幹部を務めた3年次には、大学が法人化したこともあって、企画と大学との間のルール調整に悩まされた。サンバハウスの安全性はどうなのか。体育館内に発電機を置くことが何故必要なのか。配電は、屋外で調理すること

の衛生上の問題はどうか。アルコールの問題、防犯の問題、ゴミの問題、電気量の問題、施設保全の問題…。学園祭を開催するということは、学生にとっての楽しみである以上に、大学にとっては一つの大きなリスクでもある。だからこそ実行委員と、そして参加学生にはその運営に対する責任と自覚が求められた。ひとつとびに大人になって交渉ごとが上手くなるなんてことはなくて、毎日地道に学生課や企画と話し合うしかなく、つくづく実感させられた。熱意だけではこれだけのものは動かせないということ、嫌というほど痛感させられた4年間だった。

でもそれでも私が実行委員を続けたのは、5日間という夢のような、嵐のような期間の後の、言いようのない充実感・一体感が理由だ。外語祭は実行委員だけのものではない。外語祭に関わったあらゆる人の汗と苦勞と涙（とちよっぴりのロマンス？）で彩られた5日間は、実行委員の欲目ではないが、まさに大学生生活の縮図だったような気がしている。少なくとも私にとっては、外語祭こそが大学そのものだった。

私は外語大生として、そして実行委員として、外語祭という場に関わられた幸せに感謝したい。そして1人でも多くの学生が、先生たちが、地域の住人の方が、そして未来の外語大生が、今後も外語祭という1つの場を共有し、そこに何かを感じることが出来ますように。



▲国際交流事業でチリの青年と。

やりたいことを選ぶ

トルコ語専攻
倉本 さをり

やりたいと思うことを選び、全力で取り組んできた。この「やりたいことを選ぶ」作業は、なかなか難しいものだった。なぜなら、やってみたいことが多すぎて何をするかを選ぶ時点で思い悩んでしまうからだ。何をしても自分次第という環境は、恵まれていると同時に何と大変なことかと思っただけでもあった。結局、私は自分としっかりと向き合い、そして最終的な判断にはきちんと責任を持つことだけを信条に進むことにした。進んだ道を後戻りしたり、途中で止まることもあったが、歩めば歩むほど驚くほど世界は広がった。そして今振り返って、とても充実していたと思える。

様々なことに興味を持ち、周りを見渡してみた時の大学が応えてくれないことはなかった。

逆に、今までどうして気付かなかったのかと思うほど本当に様々な活動の場があり、多様な人たちと知り合った。もちろん、人によってはそうでないと感じる人もいるかもしれない。しかし、視野を広げているいろいろなことに目を向けてみるのも、悪くないのではないだろうか。

大学生活をいかに満足のいくものにできるか、それは将来にも関わってくると思う。日々を大切に、一生懸命時を過ごしていれば、きっと充実した学生生活を送れるのではないだろうか。

応援しています。頑張ってください。

大学生活が終わる。

月並みではあるが、過ぎてみればあっという間の時だった。

四年前、私は専攻語であるトルコ語とトルコという国への大きな興味と憧れを抱いてこの大学に入ってきた。授業では、トルコの地理、歴史、政治、文化など、ありとあらゆることを教わった。しかし、卒業しようという今思うことは、トルコについてすら知らないことだらけだということだ。

もっと学ぶべきであったこと、これから学んでみたいことは山ほどある。学習に終りはないのだと、卒業を前にして初めて感じている。

しかし今の私には、言葉という武器がある。私のトルコ語が武器になるほどの水準かということは別にして、興味を持てば自分で情報を得ることができるのだ。これからも、トルコに興味を持ち、関わり続けていたいと思う。

大学生活は、もちろん勉強だけではない。部活、サークル、アルバイト、ボランティアなど、課外活動も重要だ。

残念なことに私は部活を途中で退部し、サークルにも所属しなかった。しかし、それはそれで私は自分の

退職・転出教員からのご挨拶 ①



教授
オブラス・ピーター・
ブライアン

Turning the pages of the Buzz Buzz, I am turning the clock back to my freshman professorial year and to the freshman year of the class of 1988. Two of my freshman students had combined with two others to establish a school newspaper in English and I was asked to serve as an adviser. The first issue of June 5, 1988 proclaimed: "BB will tell you what's in and out, what's new and old. BB will also listen to you. We will listen to your complaints, opinions and whatever you want to tell us. BB will be one of your good friends—a friend who is curious, talkative, kind, sometimes a little nosy but always friendly." The third

BUZZ BUZZ



issue of December 14, 1988 had a shopping map of Jizo Street in Sugamo close to the old campus with notes on a good sembei shop, a Japanese sweets shop, a delicatessen and even a goldfish store. There was even an article on where to get your hair cut. When Professor Hara became president in 1989, BB voiced the hope that he would make Gaidai a more comfortable place for studying "and also save

a few Russian students from failing please!!" BB tried so hard to live up to the soulful words of 'What's the buzz?'.... Perhaps, I have as well.

退職・転出教員からのご挨拶 ②

教授
稲田 雅洋

定年といっても、特にあらたまった感想はない。ただ、幼少より病弱であった私が、今日まで生きてこられたこと、そして大過なく定年を迎えられたことを、何よりもうれしく思う。

特に高校3年の時には腎臓病のネフローゼを患い、20日以上欠席があった。机に向かっていると微熱が出てきて、横になってしか本を読めないという辛い時期が翌年の夏まで続いたのである。また大学院博士課程の頃は、60年代の終わりで、自分だけが勉強していることは「犯罪」であると見なされた時代であったし、また自分もそう思っていた。しかし、ほかのことをする能力がなかったため、結局は教師になった。いわば典型的なデモンシカ教師である。

外語大で過ごしたのはわずかに12年である。

たかが学問、されど学問



しかし、これまでの30余年の大学教員生活をふりかえってみると、忸怩たる想いにかられることも少なくない。特に駆け出しの頃に、学生が卒論のテーマとして挙げたことに対して「そんなこと勉強して何になるの？」と問いつめたことは、いまだに重い罪の意識にかられる。本当は、たとえそれがいかなる問題であろうとも、彼らがそのことを発展させていくために、手を差し伸べるべきであったと思うのである。

歴史を学んでいて、若い頃には、細かな事実を並べるだけの教師や学者に反発したり、軽蔑したりもした。当時の私は、その人たちのめざしていたことがもっと奥の深いものであることを見抜けなかったのである。それが自らの幼稚さと傲慢さであると気づいたのは、40歳代の後半であり、理論に振り回されたり、流行の学説を追ったりすることの空しさを知ってからである。

自分の専門とする日本近代史で優れた仕事をした人たちは、戦前・戦中の困難な時期にあって、対象と真剣に向かいあい、事実を提起することで勝負していたのだ。一方、転変する戦後にあって、時流に乗った研究をした人たちは、一時的には評価されても、いつの間にか過去の人になっている。彼らの提示した事実そのものが作弄的なものとして見なされてしまっていることもある。

右顧左眄せずに研究を進めるには、理論はしょせん虚構であるという当たり前の自覚をもつことが必要であろう。たかが学問、されど学問である。

退職・転出教員からのご挨拶 ③

教授
水林 章

この大学で過ごした15年のあいだにぼくは4冊の本と相当数の論文を書いた。同時に、授業を充実したものにするために心血をそそいだ。とくに、今年大学生になった娘が中学に入った頃から、この国の教育のあまりの悲惨さに戦慄をおぼえ、自分自身の教育の実践を見直すようになった。世界の諸言語と諸文化を探求する大学にとっ

てありうべき教育プログラムと授業について真剣に考えなければならぬと思った。新自由主義という名の怪物が世界中を荒らし始めた頃である。

「将来構想」という言葉がしきりにとなえられ、ぼくは一時そこに突破口を見出そうとした。

どういう子供たちを世界に残すのか

将来像を描き、案作りに没入した。しかし残ったのは変調をきたした身体だけだった。個人的な努力によって変えられるものから変えていこうと思うようになったのは、あの途方もない疲労感をゆっくりと消化する過程においてである。

3/4年生向けの「文学」の授業をもとに中学・高校から大学の教養教育までを射程に入れて書いた文章が、みずす書房の「理想の教室」というシリーズを生み出したということもぼくには重要なできごとだが、いまはそれにはふれない。

国際交流委員会の委員長として「点検報告書」をまとめたとき、「課題」として提言したことを自分の可能な範囲で実現・発展させようと考えた。だから、すでに始めていた授業外の「学生による通訳付きのフランス文化講演会」をフランソワ・ルーセルとともに展開した。リセ・フランコ・ジャポネとの関係づくりにも手をつけた。新たにジュネーブ大学との協定を実現し、パリのイナルコとジュネーブ大学から毎年コンスタントに5~6人の留学生が訪れ、フランス語専攻の学生たちが交流を持てるようにもした。さらに、前記の「点検報告書」で追求すべき方向性として設定した、本学学生と留学生との共学にも力をそそいだ。フランス語圏からの留学生たちは、時間割の許す範囲でぼくの授業に参加してくれた。ぼくはフランス語・フランス文学・フランス文化の授業において、日本語とフランス語の両方を作業言語として位置づけ、フランス語専攻の学生にも留学生にも有益な教育実践に向かって動くようになった。1年生から大学院まで、フランス語を作業言語にするということは西ヶ原の時代からすでに試みていたけれども、それが定着し、フランス語圏の留学生たちに、語学的にも内容的にも有益な授業を提供するための工夫を自覚的に始めたのは府中に引っ越してきたころからである。

上智大学でもぼくの所属は外国語学部だ。ぼくはこういう努力を今度は四ッ谷で続けようと思う。

どういう世界を子供たちに残すべきかと人はよく問う。しかし、どういう子供たちを世界に残すのかとはあまり問わない。このキアスムの意味は深い。ぼくは後者の問いを教師たちに差し向けたい。

帰国する外国人教師からひと言



東京外大での2年

イ・ウンギョン

(朝鮮語客員助教授)

昨年4月に東京外大で最初の授業をしたのが昨日の事のようなのに、いつしか2年が過ぎ、学校を去るときが来た。東京外大のキャンパスは学校の周りを取り囲む塀がなく、開放的な雰囲気がする。塀がないので、正門や裏門が厳密に言ってどこにあるのか分からないというのも不思議だ。また、研究講義棟、図書館、学生会館を結ぶ円形の橋(?)も印象的だ。特に、8階からキャンパスを見下ろすと、建物と建物、そして建物をつなぐ道と木々は調和がとれていて、キャンパス全体がこじんまりとしつつも美しい。

東京外大で2年間授業をしながら学生たちから受けた印象は、物静かで真摯で誠実だということだった。時が経つに従って、学生たちが物静かなだけではないということが分かったが、はじめは韓国の学生に比べてあまりにも口数が少なく、少々びっくりもした。私は学部1年生から大学院まで全学年にわたって授業を受け持ったが、さまざまな学生とともにさまざまなテーマで授業をすることができたのは、とても楽しかった。

東京外大の最も特徴的な行事は、やはり11月に行なわれる外語祭であろう。朝鮮語を専攻する1年生たちは、韓国の食べ物を売る出店を開き、2年生たちは韓国語の語劇の公演をするが、学生たちが売る韓国の食べ物もおいしかったし、韓国語で行なう語劇もひじょうに感動的だった。特に今年の2年生たちの行なった語劇は、内容が悲しく、学生たちの演技が上手すぎて、語劇を見ている間たくさん泣いた。入学するときに韓国語を学び始めた学生たちが2年生になり韓国語で演劇をする姿を見ると、とても殊勝に感じられた。

いま東京外大を去ろうとして、2年間の日本での生活、東京外大での生活が脳裏をよぎる。すてきな授業ができるようにいろいろと配慮してくださった朝鮮語専攻の先生がたに感謝をしたい。そして、一所懸命に、まじめに授業に参加してくれた多くの学生たちにもありがとうと言いたい。東京外大での2年は、韓国に帰っても忘れることのできない大切な思い出となろう。



外語大のこと

グエン・ティ・トゥアン

(ベトナム語客員助教授)

この文章を書いている際に、私は「東京外国語大学に勤務し、学び、生活して間もなく2年半を過ごしたことになる、時間の経つのはなんと早いことか!」という思いをしきりに抱きました。2年あまりの仕事は私にとり、本当に楽しく、はつらつとした、また忘れ得ない思い出に満ちた時間となりました。

赴任して間もないころを思い浮かべますと、私は高揚と不安が入り交じった気持ちのなか新たな職場に慣れようと努めていました。外国人にベトナム語とベトナム文化を教育する仕事について20年あまり、私にとり一課一課のレッスン、一時間一時間の授業がつねに新たなレッスン、新たな授業であることが必要でした。外語大は実際、私が教室で新鮮さ、仕事に対する私の感覚における新鮮さを保つ上で最良の条件を与えてくれました。まず、私は私の学生に心から感謝の言葉を述べさせていただきたいと思います。私の国の言葉と文化を私に絶えず学ぶよう促してくれたのは学生たちでした。ベトナム紹介のいろいろな活動を通してと同様、教室での授業を通して、ベトナムに対する学生たちの努力と愛おしい情感を知ることになりました。学生たちの成果を前にして、私に喜びと自尊心を与えてくれたことを感謝したいと思います。人は誰かを愛した時、普通、愛した人々にさらに向上を求めます。私は時として、学生たちに厳格であったのも愛するがゆえであり、さらなる努力、さらなる成果を求めたからでした。愛し、大切に思う心を理解していただけるものと信じています。

私は外語大で同僚の先生方と仕事をする機会をもつことができ幸運に思います。先生方の自覚的で厳粛また責任感あるお仕事ぶりから多くを学びました。私はいつもこう考えています：このような環境、条件のなかで立派に仕事をしなければ過ちになる。

私がベトナムに帰る日はもう遠くはありません。外語大に勤務した月日に関する思い出は私のなかで決して薄れることはないと思っています。私にとり外語大はいつも私の外語大です。それは、私は自分をいつまでも外語大の一員であると見なしているからです。充実した月日を与えてくださった同僚のみなさん、友人のみなさん、そして愛すべき学生のみなさんに感謝致します。

帰国する外国人教師からひと言



異文化の中での暮らし

セルチュク・イシュセヴェル

(トルコ語客員助教授)

Yeni bir kültürle tanışmanın çoğu zaman heyecan verici ve bir o kadar da öğretici bir deneyim olduğu söylenir. Hatta, Japonya'ya gelirken bir arkadaşım yeni bir kültür içinde yaşamanın insanın zekasını da olumlu yönde etkilediğini söylemişti. Japonya'da geçirdiğim bir buçuk yıl beni bu yönde etkiledi mi, orasını pek bilemiyorum. Ama bu sürenin, gerek mesleki gerekse bireysel anlamda, benim için gerçekten de oldukça öğretici ve zevkli bir biçimde geçtiğini söylemem gerek. Her ne kadar hâlâ 'hashi' kullanmakta beceriksiz olsam ve Japonca'yı da 'maalesef' öğrenememiş olsam da, bu süre boyunca çok ince detaylarla işlenmiş Japon kültürünü tanıma ve, özellikle TUFS'ın sunduğu çok-uluslu ortam sayesinde, çok değerli pek çok meslektaşla tanışma ve değişik kültürlerden pek çok arkadaş edinme şansını yakaladım. Bu eşsiz deneyimi yaşama şansını verdikleri için, başta Türklük Araştırmaları Bölümü'ndeki, şimdi artık 'arkadaşlarım' olarak gördüğüm, sayın öğretim üyeleri olmak üzere, tüm Bölüm öğrencilerine, üniversitedeki tüm meslektaş ve arkadaşlarıma ve TUFS yönetimine sonsuz teşekkürler...

未知の文化との出会いは、多くの場合心躍る、そしてそれと同じほど学ぶことの多い経験だと言われています。私が日本へ出発するとき、ある友人は、異文化の中での暮らしは人の知能にもよい影響を及ぼすものだとさえ言いました。日本で過ごした一年半が、私にそのような影響を与えてくれたかどうかはわかりません。しかしこの期間が、職務の上でも、またプライベートでも、私にとって本当に学ぶことの多い、そして好ましい形で過ぎていったとは言わねばならないと思います。たとえ私がいまだに箸を上手に使えないとしても、さらに日本語を「残念ながら」学ぶことが出来なかったとしても、私はこの期間を通して、非常に繊細な細部の組み合わせによって成り立ち、機能している日本の文化を知り、また、とくに東京外国語大学が提供する多言語・多文化的環境のおかげで、非常に優れたとても多くの同僚と知り合い、さらに異なる文化圏からやって来た大変多くの知己をえる機会に恵まれました。このまたとない経験を得る機会を与えてくれた方々、今ではすでに「わが友」と言えるようになったトルコ語専攻の先生がたをはじめ、トルコ語専攻のすべての学生諸君、そして大学のすべての同僚、友人たち、さらに外大執行部にたいして限りない感謝の念を捧げます。

(原文トルコ語、翻訳：新井政美)



To: Fellow Members of Tokyo University of Foreign Studies Community

スディビヨ

(インドネシア語客員助教授)

Language learning process can be understood as a discourse in Foucaultian term within which the teacher and learner come to an understanding about themselves, their relationships to each other and their places in a language system. In such situation teacher-learner interaction forms an important condition for ultimate goal of the process.

Two years ago I had a chance of teaching at Department of Indonesian Studies at this university. At the first week I was shocked by my students' silence and politeness. During this period I tried to seeking out appropriate method and strategy to improve the learning atmosphere. I asked them not to speak their mother tongue in the classroom and said that their native language became a forbidden language. I convinced that some sentimentalists among the students might feel threatened by this change. But due to their cooperation and understanding the learning process went smoothly. At this time of my imminent retirement a special word of thanks must be expressed to them.

There is no doubt that my colleagues have been a constant source of personal sustenance. To them (Prof. AOYAMA Toru, Ph.D. and FURIHATA Masashi, M.A.) I am genuinely indebted. They have always shown me the kind of tenderness and intimacy I needed.

Ultimately I hope that the students will keep their interest to master Bahasa Indonesia and by doing so they are able to make a roaming through the garden of Bahasa Indonesia.

Best regards, Sudibyo

アフリカ・ゼミのすすめ

ゼミ紹介①

フランス語専攻
糸長 昌彦

ドアを開けると爽やかなハイビスカスティーの香り。「そんな素敵なゼミなんてない」と言い切るのは、外語大唯一のアフリカ・ゼミ、船田ゼミを見てからにしてください。溢れる個性と多様性、そして行動力に満ちた学生と教員が築く連帯はまさに「小さなアフリカ」です。2005年度のゼミ2期生には、ヨーロッパ、アジア関係なく「アフリカへの関心」から集まった13名の学生が在籍しています。一つ不思議な現象は、男性2対女性11という外語大全体の割合以上に偏ったジェンダーバランスです。アフリカを志す男性が少ないのは大いに残念。(来年度に関してはこの状況は改善されるようです。)

学生の学習希望も「児童労働問題」「子ども兵の問題」「貧困と開発協力」「旧植民地問題」「エコツーリズム」…見事にばらばらです。あまりの状況に「アフリカ社会学ゼミ」だと後期半ばまで信じきっていた学生さえいます。ですが実際は、「アフリカ現代史ゼミ」という事になっています。しかし船田先生は「アフリカへの関心、情熱があればまずはO.K.」という感じで学生の学ぶ意欲を尊重してくれるので、僕たちはかなりの自由度でアフリカに触れることができます。

こうして船田ゼミでは、1年間で一般的に必要な基礎知識（アフリカに限らず、開発とは？NGOとは？など多岐にわたります）を学ぶとともに、4年次の卒論に必要な学習を各自進め、年度末に発表する、という流れになっています。

ゼミ生と指導教員の関係は大変重要ですが、ゼミ生の印象はこんな感じです。

「先生は講義以外の活動にも大変積極的で、アフリカ各国大使の講演会や映画、音楽のイベントなどアフリカについて学ぶ者にとって貴重な機会を紹介してくれま



す。アフリカの多面性に触れることは理解を深めていく上で大きな助けです。」

「仕事と家庭を両立させていて羨ましいなあ…女として憧れます。」

「調べが甘いと本場仕込みの厳しいツッコミが入るけど、どんなに忙しそうなのも人当たりがよくて泣けてくる。」

一方の学生も2005年度の外語祭ではアフリカのポジティブな側面を見せよう、というテーマで出展および出店し、延べ1500人以上の方に見て、触れていただきました。知識を取り入れるばかりでなく、周りにも輪を広げていける学生が集まっているのも、船田ゼミの魅力です。

アフリカの将来については楽観視できない問題も多々ありますが、それに対して目を背けずに進んでいく、そんな素晴らしい雰囲気ゼミです。アフリカを志す方に、750号室の扉は開かれています。

文化研究ゼミ

ゼミ紹介②

フランス語専攻
池田 珠枝

我が李ゼミの題目は「文化研究の射程」。対象となるのが「文化」一般だけに、ゼミ生たちが取り組む内容も多様である。演習でゼミ生が行った発表タイトルを挙げてみると、

- ・経験と記憶と語り／個人としての移民：フランス移民問題と文化
- ・四人のジレンマとゲーム理論：哲学と合理性
- ・「忘却」の島・サハリン：引き揚げ問題と武田泰淳論
- ・天皇制の変容：天皇制の歴史と現在
- ・共産党の混乱：日本共産党と50年問題
- ・ポップ・ミュージックにおける批判的公共性：UKガレッジ／2ステップ
- ・Oi!パンクの特異性と（持っていた可能性）：二つのスタイルが同居した空間

上記の内容で各自が90分丸々担当し、発表と質疑応答で授業は進む。発表内容の面白さや明確さはもちろん、発表のための技術も練りに練って演習に臨む。その時点で持っている自分の知識はすべて出そうと努力する。そうして



行われる〈血と汗〉発表が面白くないはずがないし、そんな発表が毎回行われるゼミが退屈なはずがない！

そしてこんな（一見バラバラに見える）私たちにも実は共通項があるのである。それは、主体として世界や社会と関わろうとするとき、学問（＝研究）はどのようなものでありうるかを考えるということである。自分なりに「何か」を知り、その「何か」とちゃんと向き合って考え、その「何か」が成立する社会や世界を理性的かつ論理的に吟味する主体であろうとすること。しかも、そのためのアプローチとして有効な手段は文化であろうということ。切り口の多さ＝バラバラさは、社会や世界を考えるのにはかくも多くの手段があるということなのだ。

こうした多様な内容が議論できる場が成立しているのは、李教官の存在によるところが大きい。これだけバラバラな内容にもかかわらず、そのどれにも的確な助言を与えてくださるからである。ポップ・ミュージックも文学も哲学にも対応できる懐の深さなのだ。

とまあ、こんな具合なので、いわゆる「優しい／易しい」ゼミではないけれど、「文化」と言われる領域で学びたいと思っている事柄がある人、とりわけ世界や社会の問題を「文化」の観点から批判的に考えたい人にはうってつけのゼミであることは間違いがない。

更に英語を楽しむために

ゼミ紹介②

英語史ゼミ 英語専攻

川添 早久良

なぜ英語は「あなた」も「あなたたち」もyouなの？ 名詞の複数形につける'sって何？

中学や高校で英語を学んだとき、こんな疑問を抱いたことはありませんでしたか。実はこうした疑問の多くは英語史の観点から謎解きすることができるのです。私たち英語史ゼミでは、浦田先生のもとで英語を歴史的な観点から学んでいます。英語の歴史は古英語期、中英語期、近代英語期、現代英語期とおおまかに4つの時期に分けられます。17年度は近代英語の中でも、特に後期近代英語(17世紀後半から20世紀前半)の概説書を講読しました。語彙や文法だけでなく、変種や英語辞書の変遷など様々な視点から当時の英語とその背景についての知識を習得します。

こうして概説書を読む年があれば、実際に当時のテキストを読む年もあります。16年度は1611年に発行された欽定英訳聖書からマタイ福音書を読みました。このように概説書やテキストを講読する中で自分の興味あるテーマを見つけ出し、4年次の卒論へとつなげます。卒論題目は「中英語の仮定法」から「初期近代英語の助動詞Do」、「現代英語の関係詞」までさまざま。それぞれが興味を持った時代・項目について、先生の親身なご指導に支えられながら、

自分なりの切り口を武器に挑みます。英語史のゼミなので文献を分析して、というスタイルをとることが多いのですが、どの時代を扱うにしても

現代英語と完全に切り離して考えることはありません。むしろ歴史を探ることで現代英語の理解を深められるのが英語史の魅力です。

ゼミの雰囲気は真剣。英語史の知識と論文を書く視点を身につけるべく鍛えていただいております。けど決して堅苦しいというわけではありません。先生の冗談に笑い声が響くこともしばしばですし、ゼミ生同士も気心の知れた仲間といった感じです。少人数の利点を活かして、それぞれの学生に温かくきめ細かいご指導をいただいています。ゼミ終了後には、英語論文を書く際に役立つ表現を各自テキストから拾ってきて持ち寄ります。夏期休暇中には週に一回程度、自主的に集まって読書会をひらきました。どちらも談笑しながらの明るい雰囲気、ゼミを中心に皆で意欲的に学んでいます。飲み会のときに辞書の話で盛り上げられるのもこのゼミならではの楽しみではないでしょうか。常に英語学・英語史への関心を高く持ったゼミ生活を送っています。

発表の際、講評していただいた後で先生がよく、「こういう問題面白いよね」と微笑まれます。私たちのゼミの根底にあるのは、この英語を歴史的に探求することへの楽しさではないかと思います。昔の英語を知ることで現代の英語への理解が深まる。無機質に思えた文法や語が、徐々に親しみやすいものへと変わっていく。英語史を愛する先生のもとでそんな過程を楽しめるのが英語史ゼミの醍醐味です。



留学体験記

あこがれのセビリアで奮闘

スペイン語専攻

鬼塚 真維

私が一年間のスペイン留学を決めたのは、二年前の夏に一ヶ月スペイン旅行をしたときでした。旅行をした街の中でもセビリアは、日帰りのつもりで出かけたのにトラブルで素泊まりすることになった因縁の街で、なぜか強く心に残りました。なかでも一番ひきつけられたものはセビリア大学の圧倒的な校舎でした。古くは小説にも登場するタバコ工場だったこの校舎は、五百年という歴史を感じさせる風貌と存在感を持っています。

そして去年の秋、念願の留学生活が始まりましたが、スペイン語を母語として使用する人に混じってスペイン語の言語学を勉強するのは正直とても大変でした。授業時間は学部によって異なりますが、私がいた学部では一回一時間で週に3回同じクラスの授業があり、毎日課題や復習の連続です。はじめはできないまま授業に出て、内容もわからずただそこに座っているだけ、ということが続いて落ち込みましたが、慣れてくると自信もついてくるのが不思議です。現地の学生と同じ教室で一緒に勉強できたことは何にも代えがたい貴重な体験でした。

一年間一人で生活していると失敗もあります。スペインに着いて一ヶ月ほどした頃に財布を紛失。まさか自分がそんなヘマをやるとは思っておらずカードも全部入れてあったので大あわてでした。カードの停止や再発行の手続きで親にも迷惑をかけました。他人に悪用されなかったので大事には至りませんでした。一番大きな失敗だったと思います。ほかにも、カーペットを洗剤ではなく漂白剤でこすってダメにしました。ルームメイトたちは笑って許してくれましたが、今思い出しても恥ずかしいです。初めての一人暮らしだったので、自炊をするのもうまく一人分を作れず大量に余らせたり、洗濯物をためすぎたり、色々経験すると自分の未熟さを自覚します。

また、留学生活を語る上で欠かせないのが、ほかの国から来ていた留学生やスペイン人の友人の存在です。多くの時間を一緒に過ごしました。年越しは、多くの留学生が国に帰るなか、残った留学生仲間が集まって一緒に食事をし、寒空の下アパートの屋上で夜を明かしました。スペインには大晦日に夜中の十二時の鐘に合わせて十二粒のぶどうを食べる習慣があるのですが、私たちもパーティを中断して街中の人が集まる役所前の広場に出かけ、シャンパンとぶどうを頬張りました。

陽気なスペイン人、というステレオタイプがありますが、自分たちの輪以外の人に対しては必ずしも開放的ではありません。確かにスペイン人は友達を大切にす明朗な人々ですが、自分自身がそういう態度で彼らに接しなければ、一員としては認められないのです。日本とは物の考え方が違うと頭では分かっている、長年浸み着いた謙虚や遠慮といったものが邪魔をして躊躇するかもしれません。しかし、思い切って行動してみると、言葉では言えないものが得られます。仲良くなったスペイン人の友人のなかには日本語を勉強している学生もいて、自分の国に興味を持ってきている人と話すのはとても刺激的で、彼らが知っている日本について聞くのも興味深いものでした。

去年の今頃は何をしていたらうとよく思い返します。刺激に満ちた新しい環境に身を置いて仲間とおす良い機会でした。自分自身やさまざまな障害にまっすぐ向き合い、問題を解決する自信を持てるようになりました。あの一年間に経験したこと、そして、そこから得た自分自身というものを忘れることなく、さらに前に進めるよう努力したいです。



留学体験記

(投稿記事)

ウズベキスタン留学記

インドネシア語専攻

野原 悠佑

2005年3月24日、夜8時の日本への帰国便にも関わらず、日本語授業の生徒達23人が見送りに来てくれた。たった、半年の留学であったが、ウズベキスタンの人たちの温かさに胸を打たれました。

私は、大学2年の頃から、社会主義経済から資本主義経済への移行に興味があり、そこで移行過程にある旧ソ連構成国の1つであったウズベキスタンへ交換留学をしました。

まずは、ウズベキスタンってどんな国？って皆さん疑問に思われると思うので簡単に紹介します。中央アジアにある人口2000万の国で、シルクロードのオアシス都市であった、首都タシケント、世界遺産ブハラ、世界遺産ヒヴァ、世界遺産サマルカンドが有名です。1991年に旧ソ連から独立したまだ若い国です。

交換留学先のタシケント東洋学大学での学部留学生は私1人ということもあり、大変貴重な経験をする事が出来ました。冬のトルコ科のスキー旅行に付いて行ったり、英語のクラスメイトの結婚式



への参加や先生とのロシア語の個別指導など、普通の留生活では味わえない体験が出来ました。

大学での勉強の傍ら、日本の国際協力事業団(JICA)附属日本センターでの日本語クラスも持つことが出来ました。中級と上級クラスで、大学生・社会人主体のクラスでした。ウズベキスタンでは日本の戦後復興をモデルとして経済運営を行っているため、日本語は英語に次ぎ人気のある言語です(現状は観光通訳の仕事がほとんどですが)。授業では、日本の大学生の今や現代の日本を紹介しました。放課後や休日は家で両親の手伝いをするウズベキスタンの人達にとって、日本の学生が熱心に部活動に取り組む事は大変驚きだったようです。また、日本語を外国語として教える事も難しかったです。

また、ウズベキスタンではオペラ・バレエの上演が盛んであり、60回以上観劇することが出来ました。ただ、残念なことにソ連崩壊以降の経済危機のため、観劇をする余裕のある人は少ないようで、いつもガラガラでした。

ウズベキスタンというまだあまり知られていない国へ留学した事は私にとってすごくいい経験となりました。日本という国を外から見る事により、留学前よりもずっと日本の良い点悪い点分かるようになってきました。ウズベキスタンの大学生は今、自分達の手でウズベキスタンをよりよい国にしようと希望に溢れ頑張っています。そんな彼らと触れ合い、自分も頑張らなくてはと思いました。

留学生コーナー



カンボジア料理いかがですか

生まれて初めての外国生活も半年がすぎました。高校生のころ、先生や友人たちから、日本は先進国で教育水準も高いから、留学選抜にはカンボジア全国から数多くの受験生が集まりとても難しい試験が行われると聞きました。高校3年のときに先輩が日本に留学することになって、ますます関心が高まりましたが、自分の希望が実現するとは思っていませんでしたので、留学試験の合格発表を見たときはとても信じられず、夢をみているのではないかと思いました。このときの気持ちはとてもことばでは言い表せません。



▲カンボジア語教材の録音スタジオで

話に聞いたり本で読んだ日本に来てみて、現代的で美しい建物、地下にも地上にもはりめぐらされた便利な交通網、治安の良さなど住みやすさを実感しました。勉強も生活も新しいことづくめでしたが、一番の思い出は外語祭の事です。私の大学にはこのような大学祭がないので、何をやるのだろうと不思議に思っていたのですが、実際に参加してみて、それぞれ自分が専攻する言語や文化を紹介するものだとわかりました。

1年生の料理店を手伝いながら、調味料の名前や味覚を表すことばを教え合いましたし、「カンボジア料理いかがですか」という日本語を覚えてお客さんの呼び込みもしました。ご家族や他大学の友だちが買いに来てくれるのを見て、励まし合い支え合うという日本文化の美德を実感しました。料理店めぐりもして、おいしくて健康にもいいという味噌煮込みなどを一緒に食べました。また、3年生たちと「カンボジア語1日体験講座」を開き、挨拶の合掌のしかた、伝統舞踊、クローマ(万能布)の巻き方などを実演して、私の国の文化を日本の方々に紹介できたことは大きな誇りです。後日、同じような国際理解講座を埼玉県内の小学校で行う機会もいただきました。

外語祭期間のもう一つの思い出は、2年生たちと演じた一幕のカンボジア語劇です。カンボジアでたいへん有名な頓知話「トンチェイ」を演じたのですが、何回も何回も練習を重ね、正しい発音、話にふさわしい動作を心がけました。練習している間も、大成功だった公演もとても楽しかったです。この外語祭に毎年参加できたらと思いました。

この半年の思い出は、外語祭だけではありません。何より、勉強でも生活でも苦勞していた私に対して、多くの友だちが示してくれた優しさや手助けが忘れられ

ません。そういった心遣いこそが、家族や友人のいる祖国から遠く離れていても私は一人ではないのだ、という暖かい気持ちにさせてくれるのです。

(翻訳：カンボジア語専攻2年一同)



▲カンボジア語1日体験講座で

王立ブノンペン大学
社会人文学部歴史学科3年

ISEPTUFS留学生

ホー・スレイニアン



教務課からのお知らせ

卒業生等の証明書申請について

卒業生等が各種証明書を申請する場合、次の方法があります。

(1) 直接窓口へ来訪 (ただし、即日発行はしておりませんのでご了承ください。)

(2) 郵送

※電話でのお申し込みは受け付けておりません。海外在住の方等、やむを得ない場合はFAXもしくはE-mailでのお申し込みを受け付けることもあります。ただし、必ず事前に担当係へご相談願います。

なお、教務課で発行している証明書の種類は次のとおりです。

1. 卒業・修了証明書
2. 成績証明書
3. 調査書 (提出先所定の書式があるもの)
4. 単位修得証明書 (教員免許申請用)
5. 学位取得証明書
6. その他

発行に時間のかかるものもあります。事前に担当係までお問い合わせください。

(1) 直接窓口で申請する場合

教務課の窓口にて、備え付けの「証明書交付願」により申請してください。

受け取りを郵送で行うことも可能です。その場合は、予め返信用封筒 (宛先記載・切手貼付) をご持参ください。

受付時間：授業期間中 平日 9:00～17:00
 長期休業期間中 平日 9:00～12:00、13:00～16:30
 (夏・冬・春期)

(2) 郵送で申請する場合

以下の A.申請書・B.返信用封筒 (宛先記載・切手貼付) を担当係まで送付してください。

なお、発行手数料は不要(2006年3月現在)です。(郵送料のみご負担願います。)

A. 申請書

「証明書交付願」をホームページからダウンロードし、記入してください。

・学部生用 ・大学院生用

<http://www.tufs.ac.jp/common/is/kyoumu/shomei.html>

所定の用紙でなくとも以下の項目が記載されていれば結構です。

1. 氏名・フリガナ (英文を希望する場合は必ずローマ字表記を併記してください。)
 ※原則として証明書は在学時の氏名で発行します。
 改姓等があった場合は新旧両方の氏名を記載してください。
 変更後の氏名での発行を特に希望する場合は氏名変更手続をとる必要があります。(戸籍抄本等、改姓等の事実を証明する書類を添付してください。)
2. 生年月日
3. 入学及び卒業・修了年月

4. 所属 学部 : 学科または課程・専攻語
 大学院: 研究科・専攻・コース・取得学位
5. 証明書の種類・部数
 ・和文・英文の別を明記願います。
 ・厳封を要する場合はその旨記入してください。
 (記入のない場合は厳封の扱いをいたしません)
6. 必要理由・提出先
7. 連絡先 (住所・電話番号・E-mailアドレス等)
8. (留学生の方は) 国籍

単位修得証明書 (教員免許申請用) を希望される場合は、1～8に加えて次の項目も明記願います。

9. 本籍地 (都道府県までで結構です。)
10. 取得しようとする教員免許状の種類 (教科及び中学・高校の別)

B. 返信用封筒

宛先を記載し、切手を貼ったもの。

証明書の枚数が4通までは、長形3号 (23.5×12.0cm 定型最大)、それ以上になる場合は角形2号以上の定形外封筒を同封してください。

特殊扱 (速達、簡易書留等) を希望する場合はその料金分の切手をプラスしてください。

海外在住の方で日本の切手が入手できない場合は、

(日)日本国内在住の家族・知人等に依頼 (月)国際返信切手券を送付
 のいずれかの方法をとってください。

発行のための所要日数

書類を受理してから、和文で3日後、英文で7日後の発行及び発送となります。

ただし、いずれも土・日・祝日及び12月29日～1月3日は所要日数から除きます。

(窓口での直接申請であっても、即日発行はできません。)

証明書の種類によっては更に日数がかかる場合があります。

発行までの日数及び前後の郵便事情等をご勘案の上、余裕を持ってお申し込みください。

(例) 和文証明書の場合 月曜日に受理・・・木曜日発行
 金曜日に受理・・・翌週水曜日発行 (いずれも間に祝日等を挟まない場合)

注意事項

- ・本人による申請・受け取りを原則としますが、やむを得ない場合は代理人でも結構です。しかし、その場合は必ず、本人の委任状を添付してください。
- ・英文以外の外国語文による証明書は発行しておりません。ご了承ください。
- ・大学院入試出願のための調査書等、提出先所定の書式があるものについては、申し込み時に必ず申請書と一緒に提出してください。(募集要項・記入要領のコピーも添付)

なお、所見を記入する欄 (「在学中の状況」「推薦理由」等) がある場合は、必ず指導教員等、本人のことをよく知る教員に事前に直接記入を依頼し (教務課では記入できません)、所見が記入された書類を添えて申請してください。

請求・問い合わせ先

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
 東京外国語大学教務課
 (学 部) 教務係 042-330-5166 (ダイヤル)
 kyoumu-kakari@tufs.ac.jp
 (大学院) 大学院係 042-330-5169 (ダイヤル)
 kyoumu-daigakuin@tufs.ac.jp
 教務課FAX 042-330-5170